



Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録(2017.9) 平成28年度:66-67.

荷重制限が長期間に渡った下肢閉塞性動脈硬化症患者のリハビリテーションへの意欲に影響を与える要因

滝本 梨奈, 平林 由佳, 磯田 萌

荷重制限が長期間に渡った下肢閉塞性動脈硬化症患者の リハビリテーションへの意欲に影響を与える要因

キーワード：閉塞性動脈硬化症、血行再建術、リハビリテーション、荷重制限

○滝本梨奈¹⁾ 平林由佳²⁾ 磯田萌³⁾

1)旭川医科大学病院、2)医療法人 臨生会 吉田病院、3)北竜町役場

I. 目的

下肢閉塞性動脈硬化症(以下 下肢 ASO とする)とは血管内腔の狭窄や閉塞を認め、骨格筋や皮膚に虚血による症状が生じる疾患である。Ratherford 分類 6 に該当するような広範組織欠損例や治癒不全が生じやすい踵部潰瘍例は、同部位が肉芽形成で覆われるまで荷重制限が指示される。さらに荷重制限が解除後も、創部の状況により再度荷重制限が指示され、1 ヶ月以上荷重制限が指示される場合もある。荷重制限がある中で ADL の維持・回復、関節拘縮予防を目的としたリハビリテーション(以下、リハビリとする)を実施している。荷重制限が解除される時期が不明確で、見通しがたない状況でのリハビリに、次第に意欲が低下していく患者がいる一方で意欲的に取り組んでいる患者もいた。そこで下肢 ASO の術後に荷重制限が長期間に渡った患者のリハビリに対する意欲に影響を与える要因を明らかにすることを目的とした。

II. 研究方法

1. 研究期間：2015 年 7 月～12 月
2. 研究対象：創部の治癒不全のため長期間の荷重制限が指示されている、または現在は解除されたが過去に長期間の荷重制限が指示されていた中でリハビリを行っていた患者のうち同意を得られた 3 名。
3. データ収集・分析方法：インタビューガイドを作成し、半構成的面接法を用いて個室で 15～20 分程度を目安に面接を実施した。リハビリに関する思いを面接内容とし、録音し逐語録を作成し、コード化しリハビリへの意欲に影響を与える要因について抽出しカテゴリー化した。

III. 倫理的配慮

所属施設の倫理委員会で研究の承認を得た。対象者には、目的、趣旨、匿名性の保持、参加は自由意志であること、同意後も途中辞退が可能であり治療および療養上において不利益を与えないことを説明し文章にて同意を得た。

IV. 結果

協力者の概要は 40～50 代女性 3 名。荷重制限期間は 2～12 か月。血行再建術は 2～9 回。植皮術または筋皮弁を 1～2 回施行。面接結果はリハビリへの意欲に影響があると思われる要因として、11 のカテゴリー、20 のサブカテゴリーが抽出された。以下カテゴリーを【 】で示す。リハビリの意欲を低下させる要因として【疼痛】、【ADL の見通しがつかない不安】、【患肢や創部への不安・恐怖心】が

あった。リハビリへの意欲を向上させる要因として【下肢救済できた】、【入院前の ADL に戻りたい】、【家族への思い】、【医療者との関わり】、【成功体験】、【見通しがついてきた】、【リハビリに希望を見出している】、【強い意志】があった。

V. 考察

下肢 ASO 患者は、下肢動脈の再閉塞や再狭窄・創部の悪化した際は再治療が必要となり、荷重制限が長期化することがある。【疼痛】【患肢や創部への不安・恐怖心】に加え、【ADL の見通しがつかない不安】を抱えていた。リハビリを継続する意欲を持ち続けることが難しい特殊性があり、不確かさを抱えていることがわかった。そこへ【入院前の ADL に戻りたい】【家族への思い】などの要因が加わることでリハビリの動機付けになっていた。また K 病棟では他病院で患肢切断を宣告された患者が下肢救済目的で入院する事例も多く、【下肢救済できた】ことが更なる動機づけに繋がったと考える。原ら¹⁾は「患者は信頼関係が築けることで褒められること・励ましを受け入れ、より意欲になる」と述べている。低下要因ある中でも【医療者との関わり】を通し信頼関係を築くことが外発的動機づけとなっていた。また個々の目標が明確化し【成功体験】【見通しがついてきた】【リハビリに希望を見出している】【強い意志】により内発的動機が強化され、意欲が向上しリハビリに取り組むことが出来たと考える。看護師は、患者の価値観や目標を持ちながらリハビリに取り組んでいることを理解し、不確かさや低下要因がある中でも向上要因を増加させる介入を行うことが望ましいと示唆する。

VI. 結論

1. 治癒状況によって、再度荷重制限を指示される特殊性があり、意欲を持ち続けることが難しく不確かさを抱えていた。
2. 意欲の低下要因がある中でも、意欲を向上させる要因が不確かさを抱える患者の動機付けとなっていた。
3. 【医療者との関わり】が外発的動機付けとなり、リハビリを継続することで【成功体験】【見通しがついてきた】【リハビリに希望を見出している】【強い意志】によって内発的動機が強化されていた。

引用文献

1) 原由美・斉藤正美・小林宏美 他：大腿骨頸部骨折患者のリハビリテーションに対する意欲の向上と阻害要因、第 42 回日本看護学会論文集 成人看護 I, p150-153, 2012

荷重制限が長期間に渡った 下肢閉塞性動脈硬化症患者の リハビリテーションへの意欲に影響を与える要因

1)旭川医科大学病院 9階東ナースステーション
2)医療法人 臨生会 吉田病院 3)北竜町役場
滝本梨奈¹⁾、平林由佳²⁾、磯田萌³⁾

I. 目的

下肢閉塞性動脈硬化症(以下 下肢ASOとする)の術後に、荷重制限が長期間に渡った患者のリハビリに対する意欲に影響を与える要因を明らかにすることを目的とした。

II. 方法

- 研究期間:2015年7月～12月
- 研究対象:創部の治癒不全のため長期間の荷重制限が指示されている、または現在は解除されたが過去に長期間の荷重制限が指示されていた中でリハビリを行っていた3名。
- データ収集:インタビューガイドを作成し、半構成的面接を実施した。
- 分析方法:逐語録を作成し、リハビリへの意欲に影響を与える要因についてカテゴリー化した。
- 用語の定義
長期化:荷重制限が開始されてから1ヵ月以上経過している
血行再建術:バイパス術および血管内治療
創部:手術創に加え患肢の広範組織欠損や治癒不全潰瘍を含む

III. 倫理的配慮

所属施設の倫理委員会で研究の承認を得た。対象者には、目的、趣旨、匿名性の保持、参加は自由意志であること、等について文章にて説明し同意を得た。

IV. 結果

協力者の概要							
	年代	入院期間	荷重制限期間	血行再建術	デブリードマン	植皮	筋皮弁
A氏	50代女性	14ヵ月	12ヵ月	1回	6回	3回	—
B氏	50代女性	12ヵ月	10ヵ月	9回	4回	1回	2回
C氏	40代女性	2ヵ月	2ヵ月	2回	2回	1回	—

抽出されたカテゴリー		
疼痛	入院前のADLに戻りたい	見通しがついてきた
ADLの見通しがつかない不安	家族への思い	リハビリに希望を見出している
患肢や創部への不安・恐怖心	医療者との関わり	強い意志
下肢救済できた	成功体験	

V. 考察

リハビリの意欲に影響する要因

・疼痛
・患肢や創部への不安・恐怖心
・ADLの見通しがつかない不安

不確かさ

リハビリへの意欲を
低下させる

・入院前のADLに戻りたい
・家族への思い
・下肢救済できた

動機づけ

リハビリへの意欲を
向上させる

リハビリの継続を支える要因

・成功体験
・見通しがついてきた
・リハビリに希望を見出している
・強い意志

内発的動機
の強化!

・医療者との関わり

外発的動機
の強化!

【示唆された看護介入】
・不確かさや低下要因がある中でも価値観や目標を持ちリハビリに取り組んでいることを理解する。
・向上させる要因の増加と、低下させる要因の改善を図る。

VI. 結論

- 治癒状況によって、再度荷重制限を指示される特殊性があり、意欲を持続することが難しく不確かさを抱えていた。
- 意欲の低下要因がある中でも、意欲を向上させる要因が不確かさを抱える患者の動機付けとなっていた。
- 【医療者との関わり】が外発的動機付けとなり、リハビリを継続することで【成功体験】【見通しがついてきた】【リハビリに希望を見出している】【強い意志】によって内発的動機が強化されていた。